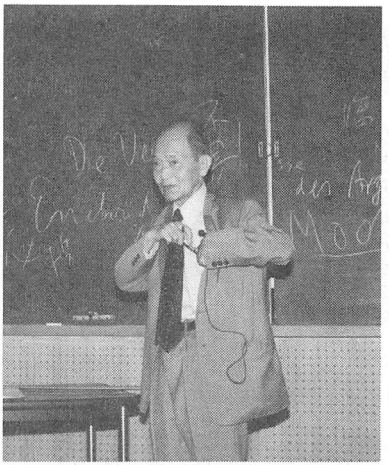
名誉会員　日比野進先生のご逝去を悼む

高橋　昭
名古屋大学名誉教授

平成十七年六月十六日、日本医史学会名誉会員、名古屋大学名誉教授、国立病院機構名古屋医療センター名誉院長日比野進先生が急性肺炎のため逝去された。あと二日で満九十七歳となられる日であった。

六月十八日、名古屋大学医学部に至近の名古屋市千種区にある一柳中央斎場において告別式が行われ、多数の関係者が先生の多方面に亙る永年のご偉業、高潔なご人格をお偲び申し上げ、幅広くかつ暖かいご生前のご指導に衷心からの感謝を捧げた。



日比野進先生（1908—2005）

先生は、明治四十一年（一九〇八）六月十八日に、岐阜県養老郡養老町にてご出生された。小学校五年生修了で、名古屋市の東海中学校に進学、さらに中学四年修了から再度飛び級で愛知県立愛知医科大学予科に入学、昭和六年（一九三一）三月に愛知医科大学本科をご卒業になられた。愛知医科大学はこの年に官立に移管され、名古屋医科大学と改称されたので、県立であった愛知医科大学の最後の卒業学級であった。在学中は常に首席を維持され、秀才の誉れが高かった。

ご卒業と同時に勝沼精藏教授主宰の第一内科に入局され、助手、

講師、助教授を経て、昭和二十四年（一九四九）七月十一日に勝沼教授が名古屋大学の第三代総長に就任されたあと、同年十二月七日に名古屋大学教授内科学第一講座に着任された。四十一歳であった。以後、昭和四十三年（一九六八）三月三十一日ご退職、四月からは国立名古屋病院院長に転出された。約二十年間に亙る第一内科学講座の教授在任の間、多数の後進の指導と医学の研究、診療に偉大な貢献を果たされた。大学を去られた昭和四十三年は、全国を席捲した大学紛争の最中であり、同門生や門下生が謝恩記念会を開催できなかったことは、痛恨の極みであった。

名古屋大学医学部では、鋭意学生教育に努められ、万遺漏なきを期する周到な講義の準備、格調の高い講義内容、試験の厳しさ、などには定評があった。内科学第一講座では、血液、神経、内分泌、循環器、呼吸器、消化器、などの研究室を統括され、それらの研究室に属する多数の教室員の指導に情熱を傾けられた。血液学は先生の最も中心的な研究分野であり、勝沼教授が創立された日本血液学会の発展に努力され、またアジア大洋州血液学会の創設（一九五八）、日本血液学会会長（一九五四、一九五八）、十数回の国際血液学会へのご出席、などの足跡を残された。先生が第九十六回の日本医史学会総会（愛知県医師会館、一九九五年六月、名古屋市）を主催された折に行われた会長講演「日本における血液学・輸血学史の流れより」では、古代における生命の源としての血液信仰、十七世紀頃に試みられた輸血、十九世紀の白血球分類、ヘモグロビンの生化学、二十世紀に入り血液型の発見、さらには近年注目を集めている血液幹細胞による再生医療の問題など、欧米や日本での研究成果を集約され、日本の血液学、輸血学の歴史について膨大な資料を基に講演された（日本醫史學雑誌、四十一巻、一五八、平成七年）。

日比野先生はこのほかに、結核病学会、神経学会、循環器学会、心身医学会、癌治療学会、胸部疾患学会、リウマチ学会、内科学会など多数の国内学会の会長を始め、アジア大洋州血液学会ほか国際八学会の会長、国

際血液学会の副会頭などを務められた。

日本医史学会では、平成四年に評議員に、同十二年には名誉会員に推挙され、前記したように、第九十六回の総会を名古屋で開催された。

先生の医学史に関するご関心の高さと博識の深さは、名古屋大学教授時代から広く学内に知られており、学生講義や回診の折にはその蘊蓄の一端を垣間見ることができた。先生は、愛知県医師会発行の「現代醫學」誌に平成二年から今日まで毎号『余滴』を連載され、健筆をふるわれた。その内容は、ご専門の内科領域に止まらず、基礎医学や社会医学にも及び、古代から現代に至る医学の歴史のエッセンスについて、先生の博覧強記を遺憾なく発揮された。

戦後間もなく米国医学が怒濤の如く日本に移入され、第一内科のカルテの記載もドイツ語から英語に変わった。昭和三十一年九月、日比野先生は欧米各国の医学研究事情視察に出張された。先生はフランス医学にも強いご関心をもっておられ、出発前にはパリの神経学者アンドレ・トマにフランス語で手紙を出され、パリの市内にある先生のオフィスを訪問し面会を果たされた。アンドレ・トマは、オリーブ・橋・小脳萎縮症の記載などで高名な方で、シャルコー・マリー・ババンスキーなどのフランス神経学の流れを汲む数少ない生存者の一人であった。アンドレ・トマは一九六一年に他界されたので、氏の現役時代最後に面談されたことになる。日比野先生は帰国後、この時に寄贈された別刷論文を紹介されながら、会談の子細を語られ、フランス医学にもっと日本人は注目しなければならないと論された。

前記「現代醫學」誌に毎号連載された『余滴』欄には、三回にわたり『十八世紀のパリの巨匠達』を執筆された。これからも、先生のフランス医学への深いご関心の一端を知ることができる。

平成十五年秋に、名古屋大学博物館において「フーフェラントと幕末の蘭方医――毛利孝一コレクションから」

展が催された。その初日の十月一日、日比野先生による講演「毛利孝一博士を偲ぶ」が行われた。ご講演は一時間、その間、先生は何の資料や原稿を見られることもなく、また着席されることもなく、朗々としたお声でフーフェラントと毛利孝一先生について講演され、満員の聴衆に深い感銘を与えられた。この企画は、博物館側の再三にわたる日比野先生への懇望により実現したものであった。その後間もなく、先生は外傷で入院、余病を併発されるなど、健康を損なわれた。従って、この講演が生前最後の公式のご講演となった。ここに、そのお写真を添えて先生のご高徳とご偉業をお偲び申し上げたい。

合掌